

婚約破棄されたので

ひっそりと生きようと思ったなら

公爵令息さまの愛が重い

Characters

ローレン

リディア付きの公爵家の侍女。リディアのことを幼い頃から姉同然に見守ってきた存在。

チェルシー

リディア付きの公爵家の侍女。リディアやローレンにとって妹のような存在。

フローラ・ガヴァナー

サクリアナ王国の男爵令嬢。王太子アレクシスの恋人。リディアが前世で遊んでいた乙女ゲームにおける「主人公」。

アレクシス・サクリアナ

サクリアナ王国の王太子。リディアの婚約者。リディアが前世で遊んでいた乙女ゲームの攻略対象でもある。

ソニア・ウェットン

ユミルトゥス王国の伯爵令嬢。ランドルの妹。リディアとは婚約破棄騒動後に出会うことになる。

ランドル・ウェットン

ユミルトゥス王国の伯爵令息。フィリベルトの友人。リディアのことをフィリベルトからよく聞かされていた。

フィリベルト・スターリング

ユミルトゥス王国の公爵令息。サクリアナ王国への留学生。どうやら留学前からリディアのことを知っていたようで、婚約破棄騒動直後に、無礼を承知でプロポーズしてくる。

リディア・フローレンス

サクリアナ王国の公爵令嬢。アレクシスに婚約破棄されたことで前世を思い出し、公爵家の義務を果たす前に、少しでも思うがままに生きてみたいと願うようになる。

一章 婚約破棄とプロポーズ

「リディア・フロレンス！ きみとの婚約を破棄することを、ここに宣言する！」
いきなり告げられた宣言に驚き、ハッと顔を上げた。

私の視界に飛び込んだ、サファイアブルーの瞳を持つ男性。茶色に近い金色の髪は癖っ毛で、背中まで伸ばして一つに結んでいる。そのほうが楽だから、と聞いたことがある——え、いつ？
いろいろな情報が頭の中で再生されて、ぐわんぐわんと眩暈がした。

「……ッ」

情報量があまりにも多くて、思わず額に手を置く。この記憶は、いったい——？

絢爛豪華なシャンデリアが吊るされ、会場を明るく照らしている。

落ち着いて、私。ここがどこなのか、思い出すのよ。ちらりと辺りを見回して、すぐに王城の広間であることに気づいた。

そう、そうだわ。ダンスパーティーに参加していたの。私の婚約者は、このサクリアナ王国の王太子であるアレクシス殿下。彼の瞳に合わせ、サファイアブルーのドレスを身にまとして。

とはいえ、会場に入場した途端、周りから冷たい視線を浴びたし、彼の隣には一人の女性がいた。

よし、だいぶ記憶が整理された。ショックでありもしない記憶が生まれたのでなければ、私に起こったのは異世界転生、そしてその手の小説でお約束だった『心身に強いショックを受けることで前世の記憶を思い出す』だ。

この世界は、私が前世で遊んでいた乙女ゲーム、『花の乙女』〜永遠を誓う〜みたい。そして卒業パーティーの日に起きる断罪イベント真っ最中って感じかな？

あれ？ まだ卒業パーティーの時期ではないんだけど？

周回していたゲームだから、流れの大筋は覚えている。今日のパーティーはただの試験後恒例のダンスパーティーだし、攻略キャラの好感度を上げるためのイベントのはずだ。よく似ているだけの別世界なのか、それとも私以外にも転生者がいてストーリーを変えたのか……いや、その考察はあと、この場を乗り越えてからだ。

私は『リディア』と呼ばれていたから、悪役令嬢に転生したってことよね、きっと。

明るい金色の髪に、エメラルドグリーン瞳の瞳。美人系ではあるけれど、吊り目だからきつい印象を抱かれることが多いで悩んでいた、十六歳の少女。

それが悪役令嬢、リディア・フローレンス。つまり、私だ。

この場面、私はどういう態度を取るのが相応しいのかしら？

花の乙女——桜色のふわふわとした髪に、明るい茶色のパッチリとした大きな瞳を持つ、この世界の主人公、フローラ。

彼女を守るように手を前にして私と対峙しているのは、婚約者であるアレクシス殿下。彼の瞳に

は、私への軽蔑がにじんでいた。

この乙女ゲーム自体はやりこんでいたけど、殿下ルートを最後まで遊ぶ前に命を落としてしまったから、どう対応すればいいのかさっぱりわからないわ。

とりあえず、ここは公爵令嬢らしく振る舞うべきよね。扇子を広げて口元を隠し、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「そうですか」

——ごめん、リディア。完璧に貴女を模倣することはできない。

一気に前世を思い出してしまったからか、「公爵令嬢としての振る舞い」は身体が覚えていても、「今までのリディアならどうしていたか」がすぐに出てこなかった。

アレクシス殿下は、一瞬呆気にとられたような顔をして、すぐ怪訝そうに眉間に皺を刻む。

「ずいぶんと大人しいのだな。ならば、きみがフローラにした嫌がらせも、ここで暴こう」

「嫌がらせ、ですか？」

そんなことしていたかしら？

私の態度にアレクシス殿下の顔面が赤くなり、青筋を立てた。怒らせちゃったみたい。

一国の王位継承者が、こんなにあっさり感情を表に出すのは大丈夫なのかしら、と他人事のように肩をすくめた。

だからこそ、私のような——いや、リディアのような女性が婚約者に抜擢されたんだろうけど。

あ、いや、この婚約って幼い頃からだったわね。他に理由がありそう。

そもそも、こんな衆目を集める場ではなく、一人きりのときにすればいいのに。前世の記憶が戻った今となっては、家系図を思い浮かべて我が家と王族が結婚した場合の血の濃さにおののき、婚約破棄自体には喜んで言いたくなくなってしまっ

いや、婚約破棄があつたから前世の記憶が戻ったわけで、正当に婚約解消の手続きをしてくれていたら……などとつらつら考えていると、それも気に喰わなかったのだろう、殿下が叫ぶ。

「白を切るな！ 貴様がフロローラを階段から突き落としたり、教科書を破いたり、彼女を傷つけていたことを知っているのだぞ！」

「それは確かな証拠がございますの？」

ざわざわと周囲の人たちが騒ぎ始める。まあ、いきなりの婚約破棄宣言だったものね。

ところで私、本当にそんな嫌がらせをしていたの？ まったく記憶がないんだけど……？

リディアがフロローラにした嫌がらせの全貌って、どんなのだった？

周回はしていたとはいえ、中途半端にブレイしていたから、覚えているところと覚えていないところの差が結構あるわ。誰か教えてくれる人がいないかな、と会場内に視線を巡らせた。

私と視線を合わせないように、みんな目をそらしてしまう。こちらの様子をうかがうだけで、関わりとはしない。私の味方はいない、ってことかしらね？

「そんな、ひどい……」

フロローラはうるっと瞳を濡らし、アレクシス殿下の袖を掴み、わざとらしく弱々しい声を出す。

弱々しいのになぜだかよく通る声のおかげで、一斉に注目的になる私。

さて、『リディア』ならここからどうする？ ちよつと記憶も落ち着いてきたから、淡々と事実を告げてみよう。

「私、フロローラさまが階段から落下したところを、目撃しただけですわ」

「証人は？」

「それをおっしゃるのなら、私がフロローラさまを突き落としたという証人はどこに？」

「それなら、いるぞ！」

いるの？ やっていいないことを証言できる人。

リディアとしての記憶も、ちゃんと私の中にある。

その記憶をたどると、フロローラは勝手につまずいて、階段から転がり落ちた感じだった。あまりにも華麗に転がっていったし、そのとき荷物を持っていたから助けることもできなかった。あの状況でどうして突き落としたと思えたのか、気になるわ。

「では、証人をお呼びください」

「……いいだろう。ここへ」

アレクシス殿下が証人と呼んだのは、セシリアという上級生だった。表情が硬く、戸惑っていることがよくわかる。彼女はおそるおそる口を開いた。

「わ、私は確実に見ましたわ。リディアさまがフロローラさまを突き飛ばしているところを！」

「そのとき、どのように突き飛ばしたのか、真似してくださいさる？」

扇子を閉じて、ペシンと手のひらに打ちつける。ビクツと肩を揺らした彼女は、私が突き飛ばし

たというポーズを取る。両手を突き出したポーズだ。

「それはおかしいですわ」

人差し指に頬を添え、キツパリと言いつ切る。ぴくりとアレクシス殿下の眉が跳ね上がったけれど、気にしない。

「フローラさまが階段から落下したとき、荷物を持っていましたのよ。それを床に置いた覚えはありません。……そういえば、セシリアさまはすぐに駆けつけましたわね？ 荷物を両手で持っている私を目にしませんでしたか？」

「ゆ、床に置いて、持ち直したのでしょうか？」

「いいえ。あれは魔石の入った箱ですもの。一瞬たりとも我が身から離しておりませんわ」

魔石って、衝撃で小さな爆発を起こすことがあるから、持ち運ぶときはそつと静かに歩かないといけないの。先生も気をつけるように、と口を酸っぱくして注意していた。

そもそも、本来なら荷物を運ぶ当番だったアレクシス殿下が、私に押しつけていったのよね。

いつもそう。私は殿下の尻拭いばかり——あ、これ、今までの不満をぶつけてもいい場面なのでは？ ふつふつとはらわたが煮えくり返ってきたわ！

「なぜ私その日、魔石を運ばなければいけなかったのか……そこを理解しておりますか、アレクシス殿下？」

「どういう意味だ？」

ぴくりと片眉を跳ね、低く唸るような声を出すアレクシス殿下に呆れて、嘆息した。

「授業が終わったらずぐに教室から出ていきましたよね？ その日の荷物当番は貴方だったことをお忘れですか？ 『これを運んでおけ』と私に押しつけて、殿下は早足で去りましたわよね。それに関しては証言を取れないかもしれませんが、魔石の持ち運びを行う際は誰がどこへ動かしたか記録を残しますの」

そう、今までは仕事や当番を押し付けられても、周囲に見て見ぬふりをされたら泣き寝入りするしかなかったのよね。ゲームの強制力でも働いていたのか、私だって公爵令嬢なのに、殿下の影響力が絶大でどうしようもなかった。

でも、今回は違う。私が魔石を教室から準備室までどういうルートで運んだか、先生に申告した記録が残っている。少なくともその時間、私は魔石を持っていた。

「それに、婚約者がいるにもかかわらず、フローラさまと二人きりで密会していたそうですわね。私への嫌がらせでしょうか？ 子どもの頃から次期王妃という重荷を背負わされた、私の立場は？」

「なっ……！ やはり王妃の地位を狙っていたのか！」

あ。——この人、バカだわ。

こほん、と咳払いを一つ。さつき、思い切り変な表情をしました。

私、今、しっかりと『重荷』と伝えたのに、どうしてそうなるの？

王妃になるための教育は、それはもう厳しかった。そんな姿を見てきたはずなのに、彼は我関せずとフローラに恋をしてしまったのよね。

別に、それはいい。

素直に婚約を解消してくれと頼まれたら、気持ちの整理をつけるのに少し時間はかかったかもしれないが、円満に身を引くことができただろう。

だけど、私を陥れようとするのは、ハッキリ言って気に食わない。

話の雰囲気は怪しくなっていくのを感じたのか、フローラがぎゅっとアレクシス殿下の腕に抱きつく。彼は「フローラ……」と愛しそうに甘く彼女の名を呼んだ。

フローラはどうして、悪役令嬢を陥れようとするの？ 確信は持てないけど、他の攻略対象の定石から判断するに、ここで断罪劇を行うのは早い。ゲームどおりじゃない。なにが起こっている、あるいは起こそうとしている？ フローラではない第三者が予定を狂わせた可能性もある？

ぐるぐると思考を巡らせていると、誰かの大きなため息が耳に届いた。

「……あまりにも無意味な……子どもの喧嘩会場か、ここは？」

心底呆れ果てたような声。

本当にね。心の中で同意のつぶやきをして、にっこりとアレクシス殿下とフローラに美しい微笑みを見せ、カーテシーをした。

「婚約解消の件、承りました。本日、父に伝えますわ。それでは、ごきげんよう」

我ながら、凛とした態度をとれたと思う。くるりと踵を返して、誰かが口にした『子どもの喧嘩会場』から去ろうと一歩を踏み出す。

——言い得て妙ね。

ツカツカと足音を立てて、まっすぐに背筋を伸ばして会場から出ていった。最後まで、一度たりとも振り返らずに。

だから、驚愕で静まり返った会場にざわめきが暴発するより早く、私一人のためにパーティーを蹴るも同然の迷いのなさで追いかけてきてくれた人に、この時はまだ気づかなかった。

それにしても、婚約破棄ってことは、もう次期王妃教育を受けなくてもいいのよね？
やった！ 王妃教育の時間が自由になる！

会場の近くで待機していた御者に駆け寄ると、彼は私を見て瞬きを繰り返していた。

「お嬢さま、ずいぶん早いお戻りですね……？」

「ええ、ちよつとね。すぐに屋敷までお願い。お父さまに伝えないといけないことがあるの」

「かしこまりました」

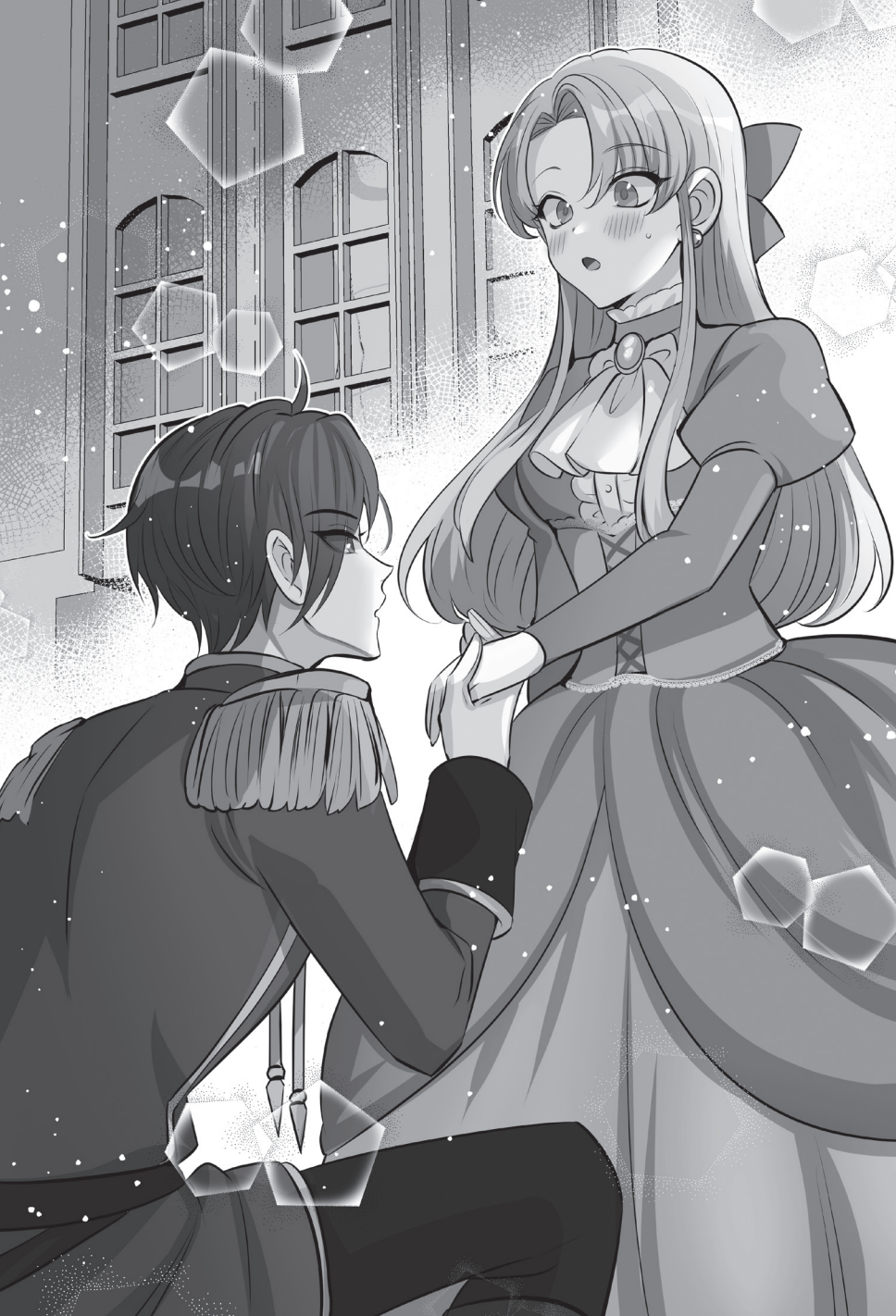
「——お待ちくださいっ、リディア嬢！」

馬車に乗り込む前に呼び止められ、振り返る。その声は、息が乱れて少し荒くはあったけれど、さつき聞こえた声と同じだったから。

私のすぐ前までやってきた彼の息が整うまで、ただ見つめ合うこと数十秒。

薄闇の中、王城の灯りが彼を照らす。

私の記憶が正しければ、彼は隣国の公爵家の令息、フィリベルト・スターリングさまだ。ささやかなパーティーとはいえ、賓客ともいえる彼が抜けだしてきて大丈夫かしら？ いえ、早々に場を



辞した私ができることじゃないけど。

艶やかな赤髪は短くて、サラサラとしている。整えられていたはずのそれが少しだけ乱れているのは、ここまで走ってきてくれたから？ 切れ長の黒曜石のような瞳が魅力的な男性だ。すっと自身の胸元に手を添えて、彼は真摯な面持ちになった。

「竜の国、ユミルトウスの公爵家嫡男、フィリベルト・スターリングと申します」
名前をこころもちゆつくり発音されたことで、意図を察する。

「フィリベルトさま……とお呼びしてもよろしいのかしら」
「ええ、ぜひ」

ここが乙女ゲームの中だからか、フィリベルトさまはとても美形だ。

彼のことを見ていると、なぜか懐かしい気持ちになった。前世のゲームの記憶なのか、今生で実際にあったことがあるのか……、駄目ね、思い出せないわ。

さて、これからなにを言われるのかしら。しんと流れた数秒の沈黙、それを破ったのは彼だった。こちらに近づいて跪き、正視される。

「オレと……いえ、私と結婚してください」

フィリベルトさまのプロポーズは、あまりにも衝撃的だった。

「……あの、私、先ほど、婚約を破棄されたばかりなのですが……？」

「はい。あの場にいたので存じております。失礼を承知で声をかけました。王太子があなたを手放した今、明日になればあなたの屋敷の門前には、婚約を申し込む男たちの馬車が列をなすでしょう。

彼らに先を越されるわけにはいかないのです」

切々と訴えられる。『リディア』ってそこまで言うほどかしら……？

「……では、後日、フローレンス邸に来ていただけますか？ そのときに、詳しいお話をしましょう」

返事はしなかった。というか、できなかった。私の心情を慮おもんばかってか、フィリベルトさまはただ小さくうなずいた。すつとカーテシーをしてから馬車に乗り、背もたれに身を預ける。

駆け出した馬車の中で、今夜は一気にいろいろなことがあったな、と窓の外を眺めていると、急に視界がぼやけた。

胸を刺すような痛みを感じて、そつと胸元に手を置く。

ああ、私——『リディア』は、アレクシス殿下のことが本当に好きだったのね。

ぼろぼろ、ぼろぼろと大粒の涙が流れ、ハンカチを取り出して目元を覆う。前世の記憶がよみがえり、混乱してしまっただけで、殿下との思い出もちゃんと私の胸の中にある。

だから、わかるの。どうしてつらい王妃教育を耐えられていたのか——……でも、もう終わり。この馬車の中でたくさん泣いて、この恋を終わらせよう。

それでいいよね、『リディア』。

私はリディア。

前世の記憶を思い出しても、リディア・フローレンスであることは変わらない。

ちゃんと、前を向いていかないと。

ハンカチで涙を拭ぬぐって、ゆつくりと深呼吸を繰り返す。

大丈夫。きちんと調べてもらえば、フローラを突き落とした話は冤罪だってわかるはず。アレクシス殿下とフローラの話は、もう割り切るしかない。

家に着いて馬車から降り、すぐにお父さまの部屋に足を進めた。

扉の前でもう一度深呼吸。ノックを三回して、返事を聞いてから中に入り、お父さまのところまで近寄ると、私が泣きはらした瞳をしていることに眉を上げて動きが固まる。

「リディア、なにがあった？」

机に肘をつき、両手を組んで口元を隠したお父さま。怒りに耐えているような、重低音が室内に響いた。

私が今日のことを淡々と説明すると、お父さまは椅子から立ち上がった。こちらに歩み寄り、ぎゅつと抱きしめて頭を撫でてくれた。

「大変な思いをしたね」

「お父さま……」

一人でよくがんばったね、と柔らかく労いたられて、また目の前がぼやける。

お父さまの手つきは優しく、額を押し当てるようにして声もなく泣いていると、私が泣き止むまでずっと撫でてくれた。

私の——『リディア』の初恋は、見事に散ってしまった。

きつとお父さまは、『リディア』の恋心を感じ取っていた。だから、慰めてくれているのね。心

優しい家族を持っているんだわ、私は。

ようやく泣き止んで、顔を上げ、ほんの少しだけお父さまから離れた。

「私とアレクシス殿下の婚約は、白紙に戻してください。それと……竜の国の、えっと、フィリベルトさまから、プロポーズをされました」

「……え？」

一瞬思考が止まった様子のお父さま。やっぱり、そういう反応になりますよね、と思ったなら、両肩をガシッと掴み、「その話を詳しく！」と目を輝かせたので、こちらがぼかんとしてしまう。

「わ、わかりました」

詳細を希望されたので、執事を呼んでお茶を用意してもらい、そのお茶を飲みながらフィリベルトさまのことを話す。

竜の国、ユミルトウスの公爵家嫡男。留学生として、この国の学園に通っていた。私と会話したことは、数回しかないはず。

——前世を思い出す前の『リディア』と、前世を思い出した私。同じ『リディア』と名乗っているのかしら、と話しながら考える。

カーテシーやダンスといった身体が覚えている所作は問題ない。次期王妃教育の内容や主要な貴族の名前も覚えている。けれど、性格は前世の私に近くなって、がらりと変わってしまったと思うのよね。

「後日、詳しいお話をすることを、約束しました」

「そうか……リディアはどう思う？」

「……貴族の結婚は義務ですわ。ですが、あのように婚約破棄をされたあとですので、できれば、その……どなたかのもとに嫁ぐ前に恋ができるような、そんな自由な時間を少しでもいただきたいです」

互いのことを高め合えるような、恋を。

その恋の相手が、フィリベルトさまになるかどうかは、わからないけれど。

「ただ」

「ただ？」

「私、次期王妃として相応しくあるためにいろいろと自分の性格を抑えてきたところもあるので、必要以上に猫を被ることは今後一切やめますわ。それを見て尚、フィリベルトさまが私を望むなら自由に過ごしたいなどと甘えを申さず、プロポーズを承諾してもいいと思いますの。ユミルトウスは大きな国。我が公爵家にも利益があるでしょうし……」

「リディア……」

利益で結婚って、本当、貴族っぽいけどね。それでも、貴族というのはそういうものだ。

公爵家の娘として、私が自由にできるのは、ほんの少しのことだけ。それを理解している。

「あ、いっそ私がユミルトウスに留学するのはどうでしょう？　どんな国なのか気になりますわ。今通っている学園には殿下たちがいますし……きつと、いろいろな目で見られるでしょうし……」
しゅんと肩を落としてみせると、お父さまはあたふたとしていた。

やだ、お父さまだったら、こんなに可愛らしいところがあったのね。

……ああ、そうか。

こんなふうに対話することなんて、めつたになかったものね。

立派な王妃にならないとって、ほとんどの時間を勉強に費やしていた。

もう王妃になることはないけれど、たくさんのお金を身につけたし、その知識はきつとどこかで役に立つでしょう。——役に立つって、信じてたい。

「ひとまず、明日は学園を休みますわ。フィリベルトさまを招く手紙を出したほうがよろしいでしょうか？」

「いや、後日と伝えているのだろう？ ならば、あちらから連絡が来るだろう」

そんなものかしら？ 諸々の説明が終わった瞬間、どつと疲労感が押し寄せる。今日は泣き疲れてしまったのもあるだろう。泣いたあととって、どうしてこんなに倦怠感があるのかな？

それにしてもいっぱい泣いてしまった。明日、腫れていないことを祈ろう。

「それでは私は下がらせていただきますが……お父さま！ 絶対、絶対に！ 婚約は白紙にしてくださいませね」

「わかったわかった。今日はもう休みなさい。あとで食事を部屋に運ばせよう」

「……いいえ、今日は要りませんわ」

食べる気になれなくて、ふるふると首を横に振ると、お父さまは「そうか」とだけこぼした。静かにカーテシーをして足早に廊下を抜け、自室に着くと着替えもせずにベッドに横たわる。

寝る体勢になった途端、疲労感が睡魔に形を変えて襲ってきたわ。

それも、そうよね。今日のパーティーに備えて、いろいろがんばっていたのだから。

「はあ……」

大きなため息を一つ。これからのことを考えると、頭が痛くなっちゃうわ。

まずは王妃教育をキャンセル、学園の先生たちにも婚約破棄のことを伝えないと……やることはたくさんあるわね。

そう思考を巡らせていると、扉がノックされた。

起き上がってベッドに腰をかけ、「誰？」と尋ねると、すぐに聞き慣れた声が返ってくる。

「お嬢さま、ローレンです。チェルシーも一緒です」

ローレンは私の専属侍女だ。チェルシーはローレンの妹のような存在。

「入っていいわよ」

入室を許可すると、キィ、と小さな音を立て、扉が開いた。

桶にたっぷりのお湯と水。それからタオルを持った二人が入ってくる。

「旦那さまがお嬢さまの目のケアを、と……」

「お嬢さま！ 目が真っ赤ですよっ！ すぐに冷やさなくちゃ！」

ローレンの言葉を耳にして、お父さまが彼女たちを呼んでくれたのだとわかり、心がぼかぼかと温かくなった。それと同時に、心配をかけてしまい、申し訳ない気持ちも芽生える。

二人とも、私のことを心配そうに見ている。なぜかチェルシーは瞳をうるうると潤ませて、今に

も泣きそうになっていた。

「そうね、ケアしなきゃ。その前に、着替えるわ」

のろのろと立ち上がり「手伝ってちょうだい」と二人に頼むと、彼女たちは首肯した。

ローレンがチェルシーにネグリジェを持ってくるように指示すると、彼女は桶とタオルを置いてすぐにクローゼットからネグリジェを持つてくる。

ドレスからネグリジェに着替え、再びベッドに寝転がると、ローレンは水で冷やしたタオルをぎゅつと絞って、私の目元にタオルを置いた。

冷たさが心地いい。少ししたら、今度は温かいタオルに交換。それを数回繰り返してくれた。

「ねえ、ローレン、チェルシー」

「はい、リディアお嬢さま」

「いかがでしたか？ お嬢さま」

「……ありがとうね」

小声で伝えた感謝は、きちんと彼女たちの耳に届いたようで、二人は「もったいないお言葉です」と柔らかい口調で口を揃えた。あまりにもピツタリだったので、ちよつとだけ口角が上がる。

タオルをとって起き上がると、手鏡を渡された。ふふ、ひどい顔。でも、憑き物が落ちたようにスッキリとしたわ。

「少しはよくなったかしら？」

「はい。明日、腫れることはないと思います」

「……そう。今日はもう休むわね。二人とも、下がってちょうだい」

「お嬢さま。一つだけ……よろしいですか？」

すつとローレンとチェルシーが跪いた。

いきなりすることに彼女たちを注視すると、二人はそれぞれ私の手をぎゅつと握り、朗らかな笑顔を浮かべる。

「私たちはお嬢様のことが大好きです。これからも、よろしく願っていますね」

ローレンの優しさが、傷ついた心に沁み込んでいく。チェルシーもにっこりと笑って、何度もうなずいていた。

「……私は幸せものね。ありがとう、二人とも。私も貴女たちが大好きよ」

「光栄ですわ、リディアお嬢さま」

「嬉しいです、リディアお嬢さま」

二人は、まるで騎士のように私の手の甲に唇を落として、部屋をあとにした。

ローレンは私よりも年上だから、侍女というより姉に近い感覚なのよね。チェルシーは妹って感じ。本当、侍女に恵まれていると思う。

私が次期王妃教育を受けていたときも、『そんなに詰め込んで、覚えられることも覚えられませんよ』と気分転換させてくれたの。

……それにしても、手の甲にキスって、女性からは初めて受けたわね……

騎士や貴族の男性が挨拶をするときにされるくらい、だった。まあ、いいのだけど。

疲れたし、今日はもう休もう。毛布をかけて目を閉じると、あつという間に眠りに落ちた。
——一日のうちいろいろなことがあったから、疲労困憊^{ひろうこんぱい}だったのだろう。婚約破棄を宣言されたショックで前世を思い出し、やってもいないことを捏造され、他国の男性からプロポーズされたもの。

前世の記憶だけでも頭の中は結構、混乱している。それを整理するためにも、睡眠は大事よね。



翌朝、ローレンに起こされた。彼女が目覚めの紅茶を淹^いれてくれて、部屋の中にふんわりといい香りが漂い、鼻腔をくすぐる。

「熱いので、お気をつけください」

「ありがとう」

カップを受け取り、ふーふーと息を吹きかけて冷まし、一口飲んだ。

温かい紅茶が喉を通り、胃の中に落ちていく。身体がじんわりと温まっていく感覚にホッとして、ゆつくりと息を吐く。

ローレンが、『のんびりと好きなことをしてほしい』とお父さまからの伝言を覚えてくれた。でも、私の好きなことって、なにかしら？

正直、自分の趣味がどんなものか、わからないわ。

前世の私なら、ゲームってきっぱり言い切れる。でもこの世界の私は、次期王妃教育に追われていて、好きなことを考える余裕なんてなかった。

こういうのって、誰に聞けば答えがもらえるのかしら？ 誰に声をかけようかとクラスメイトたちの顔を思い浮かべようとして、気づく。——私、気軽に相談できる『友人』がいない！

そのことにショックを受けた。今までずっと、王妃教育をこなすことしか頭になかったのだと、突き付けられたような気がして、肩を落とす。

「お嬢さま……？」

「……なんでもないわ。ローレン、今日は髪を三つ編みにしてくれる？」

「三つ編みですね、かしこまりました」

ドレッサーに移動して椅子に座ると、ローレンは櫛^{くし}を手にして、慣れた手つきで髪を毛先から梳^かかしていく。そのまま髪を左右にわけ、きつちりと三つ編みに編んでくれる。器用ね。

せっかくの休日、今までできなかったことをして、嫌なことを忘れよう。ぐっと両手の拳を握って意気込んだ。なにかをやるのなら、こうして髪をまとめていたほうが動きやすいもの。

好きなことをと言われても……本当になにをしようか悩んじゃうわ。考えてみれば、プライベートな時間ってあまり過ぎた記憶がない。王妃教育で学ぶことが多くて、家に帰っても予習復習でそういう時間を作ることができなかった。

はあ、と小さくため息を吐くと、ローレンが心配そうに「お嬢さま？」と顔を覗き込んできた。

「ねえ、ローレン。貴女の趣味ってなにかしら？」

「え、私の趣味……ですか？」

友人がいないのなら、侍女に聞けばいいじゃない。そう聞き直ってローレンに聞いかけると、彼女は明らかに声をひっくり返し、こほんと咳払いをする。

「あ、言いたくないのなら、話さなくてもいいのよ」

「……いえ、突然で驚いてしまつて。私の趣味はそうですね……読書、でしょうか」

ローレンが本を読んでいる様子を想像して、似合う、と瞬間的に思つてしまつた。

黒髪に茶色の瞳という日本人っぽい見た目のだけど、すつごく！美人なのよね、ローレンつて。前世の私は日本人だから、彼女の容姿はとつても親近感が湧く……あ、前世を思い出す前から仲がいいんだけどね、私たち。

「どんな本を読むの？」

「そうですね……最近だと、竜の国の物語を読みました」

ドキリと鼓動が跳ねた。どんな内容の本だったかを尋ねると、竜と人間のロマンスだったようで……ええ、それ、ちよつと気になる。

そういえば、そもそもなぜ、ユミルトウスは竜の国と呼ばれているのかしら？この世界に竜がいることはゲームの知識で知っているし今生でも学んだけれど、ある種の生物兵器なものだから、具体的にどこの国に何頭いて、とまでは伏せられているのよね。そう呼ばれるからには多いのかしら？

「私も読んでみたいわ」

「では、部屋に持つてきましようか？」

「そうねえ……うーん……。いえ、私が書庫に行くわ。他にも読みたい本があるかもしれない」

ローレンと視線を合わせると、彼女は小さく顎を引いた。

身支度を整え、簡単に朝食を摂り、すぐに書庫へ足を運ぶ。

朝食時にはお父さまもいて、心配そうなまなざしを注いでいたから、『大丈夫です』という気持ちを込めてにつこりと笑つてみせた。

昨日の今日だけ私の食欲が戻つてくれたおかげで、お父さまは安心してくれたみたい。

書庫に入つて一分もしないうちに、ローレンは本を持つてきてくれた。

竜の国の物語、どんな内容なのか胸が躍るわ。

「ここで読むわね。お茶の用意をお願いできる？」

「かしこまりました」

我が家の書庫は、テーブルと椅子が常備してあつて、ここでゆつたりと読書を満喫できる仕組みなの。窓辺の椅子に座り、テーブルに本を置いた。さつそく読みましょう。

ぱらりと表紙をめくり、期待に胸を膨らませて読み進めた。

戻つてきたローレンは、おやつとしてバタークッキーも用意してくれた。お茶を淹れ、テーブルの上に置く。

バターをたつぷりと使つたクッキーは美味しいのだけど、カロリーがちよつと気になるどころ。……でも、まあ、今日くらいは構わないか、とクッキーを口にする。サクッと軽い食感とふんわり

りとバターが香って、口内でホロホロと崩れていく。美味^{おい}しいー！
クッキーを飲み込んだところで、紅茶を一口。ああ、後味サツパリ。

「美味しいわ」

「ありがとうございます」

「私はこのまま本を読むから、ローレンも好きにしていますね」

「はい、リディアお嬢さま」

さあて、今日は書庫にこもって、じつくりと読書を楽しみますか。

竜と人間のロマンスを！

——その竜は、ずっと独りぼっちだった。

なぜ、自分がここに存在しているのかわからない。

ただ、そこに『いる』だけだった。

そんな中、竜はあたたかな光を感じる。

ゆっくり、ゆっくりとその光に導かれるように歩を進め、その光に触れた。

光はすっと消えて、代わりに一人の少女が現れ、竜に触れて微笑む。

「やっと逢えましたね、私の騎士さま」

どうしてここで一巻が終わりなのよー！ やつと少女が念願の竜に出会えたのにーっ！

思わず、ほう、と感嘆の息を吐いてしまった。気になるところで終わってしまったって、続きがものすごく気になるわ。

「二巻はないのかしら？」

「その本、先日発売されたばかりですので……」

それなら二巻の発売はまだ先のようなね……発売されるまでお預けか！ うう、本気で続きが気になるわ。

物語は、一人の少女の夢の中に、『ここはどこ？』や『独りぼちは寂しい』と泣く小さな竜が出てきて、『それなら私があなを探しに行くよ。探し当てたら、私の騎士さまになってね』と少女がその竜を探すため冒険に出る——という内容だった。

人がめつたに通らない森の奥深くに竜が隠れていて、ずっと洞窟の奥で暮らしていたけれど、ある光——きつと少女のことよね——が見えて、ようやく外へ歩き出す。

そんな少女と竜が出会ったところで物語が終わってしまった！ どうして少女は竜を騎士にしたのかしら？

「お昼の時間になりましたが、昼食はどうしますか？」

「もうそんな時間？ うーん、お腹空いていないから、まだいいわ。ローレンは食べてきて？」

なんせ、紅茶とクッキーで、結構お腹がタポタポしているのよね。

午前中のすべて、読書に費やしたわ。こんなに夢中になって小説を読んだのって、この世界では初めてかもしれない。

「そんな……具合が悪いのですか？」

「違う違う。本を読みながら、お茶とクッキーを食べたからよ」

ローレンは声を震わせた。眉を八の字にして軽く手を振って、元気なことをアピールしてから、空になったティーポットとクッキーが載っていた皿に視線を誘導すると、彼女は「ああ……」と納得した。

「なんせ、あれだけたつぷりとあつた紅茶が、空になっていいるからね。」

ローレンの淹れる紅茶は美味しいから、ついつい口に運んじゃう。

「それでは、部屋に戻りますか？」

「そうねえ……もう一冊、読もうかしら。お勧めはある？ あ、できればあまーいロマンスがいいわ」

私がリクエストすると、ローレンはスタスタと迷うことなく本棚に向かい、一冊の本を取り出して戻ってきた。

「こちらのシリーズをお勧めしますわ。『戦乙女のサーガ』というタイトルですが、主人公が恋に落ちて、どんどんと魅力的な女性に変わっていくんです」

「それは面白そうね。……ねえ、本の場所をすべて把握しているの？」

「ふふ。この書庫、私も管理者の一人なのですよ」

そうだったの!? 目が点になった。彼女は口元を手で隠して、くすくすと笑う。

もしかしたらローレンは、根っからの本好きだったのかもしれないわね。そう考えながら、表紙

に視線を落とした。

戦乙女ということは、戦う女性なのね。

どんな内容なのか、今から心が躍る。午後はこの本をじっくり読むことにしましょう！

楽しみができたわ。——思えば、こうやって読書する余裕がなかったのよね、私。

うん、昨日あれだけ泣いたからスッキリしたし、記憶もだいぶ落ち着いた。

リディアはリディア、私は私。

彼女の記憶もちゃんとするけれど……混ざり合って『私』になった感覚。

きつと、もっと幼い頃に記憶が戻っていたのなら、アレクシス殿下の婚約者になることはなく、

別の道を歩いていたのかもしれないわね。

まさか、十六歳で記憶が戻るとは思わないじゃない？

それだけ『リディア』にはアレクシス殿下からの婚約破棄宣言が衝撃的だった、ということなんだろうけど、さ。

本の表紙を撫でて、さあ読もうとめくろうとしたら、チェルシーが私たち、いえ、私を探していたようで、息を切らしながら駆け寄ってきた。

「大変です、お嬢さまッ！」

チェルシーはあわあわとよくわからない手の動きをしながら、ガシッと私の手を掴んで立ち上がらせ、ぐいぐいと引っ張っていく。

「どうしたのよ、そんなに慌てて」

「ユミルトウスの方がいらつしやっています！」

「……え？」

昨日の今日で早くない？ いや、早すぎない？ 私、かなりラフな格好なんですけれど——！?

「ちょ、ちよつと待って、チエルシー！ せめて着替えさせてッ！」

チエルシーがずんずんと進んでいく廊下の先には、応接室がある。というか、もう近い。

もしかしたら、私の声が聞こえてしまったかもしれない、とヒヤヒヤしながらなんとかチエルシーの動きを止める。彼女は一度足を止め、くるりと振り返り、にぼつと笑いグッと親指を立てた。

「大丈夫ですよ、お嬢さまなら！」

「いやいやいやッ！ 他国の方とお会いするのなら、こんなラフな格好失礼でしょ！ だから、一度私の部屋に——……」

がちやり、と応接室の扉が開き、フィリベルトさまが様子をうかがうように辺りを見回し、私たちを発見すると満面の笑みになる。

あああ、大きな声を上げてしまったから、気づいてしまったのね！

私と視線が合うと、フィリベルトさまはまなじりを下げた。……それにしても、改めて彼の容姿を確認すると、格好いい人なのだとしみじみ感じた。まるで、王子さまみたい。

あ、公爵の息子だから、王族の血は流れているのか。

燃えるような赤い短髪はオールバックにして、昨日は隠れていた額が見える。エメラルドの耳飾りは、ピアスなのかしら、イヤリングなのかしら……待って、その色、私の瞳の色！

黒曜石のような切れ長の瞳が、柔らかく細められた。スタスタとこちらに近づいて、ぴたりと足を止める。

私よりも頭一つ分くらい高い身長。程よく鍛えられているような身体。

うーん、乙女ゲームの中だから、こんなに格好いいのかしら？

「昨日ぶりですね、リディア嬢」

「ええ。昨日ぶりですね、フィリベルトさま。……ずいぶんと、素早い行動ですね……？」

「こういうのは先手必勝だと父から教わっています。……普段の制服やパーティーで着るドレスも似合っていますね、休日の服装も素敵ですね」

「……ありがとうございます……」

本気でそう思っているのか、休日だからってラフすぎじゃね？ という意味なのか……どちらかしら。前者であってほしい。

訝しむように彼を見上げると、私の前髪を梳くように手を動かす。

「あの？」

「急いで来ていただいたようで……」

あああ、穴があつたら入りたい！ 汗で額に張り付いた髪を拭ってくれたのね！

羞恥で頬が熱い！ フィリベルトさまは笑みを深めて応接室まで私をエスコートする。きつと声が聞こえたのよね。だから出てきたんだわ。

応接室に入ると、お父さまは私たちを見て少しの時間言葉を失った。すぐにごほん咳払いし、

「座りなさい」とうながす。

お父さまの隣に座ろうとしたけれど、フィリベルトさまが椅子を引いてくれたので、ちらりとお父さまに視線を送り、小さく首肯したのを確認した。

「ありがとうございます」

椅子に座りお礼を伝えると、彼は頬を緩ませて、私の近くに座った。

チェルシーにお茶を淹れてもらい、彼女が一礼して部屋から出ていくのを見送ると、フィリベルトさまが口を開く。

「急に訪問して、申し訳ありません」

「いや、正直驚きましたが、昨日、リディアから聞いていたので……」

お父さまも、まさかこんなにすぐ来るとは思っていなかったでしょうね……驚きすぎて口調が怪しいわ。

お茶に手を伸ばして、とりあえず落着こうと一口飲む。

「なら、話は早いですね。昨日、私はリディア嬢に求婚しました」

——お茶、飲み込んでいてよかった……！ 危うく咳き込むところだったわ！

「……リディアを選んだ理由を、お聞きしても？」

あ、お父さま、混乱から少し回復したみたい。

なにかを探るように、じつとフィリベルトさまを凝視するお父さま。

いきなりの求婚だったし……なにか、理由があるのかしら？

私も理由が気になり、フィリベルトさまの答えを待つ。すると、彼は一度紅茶を飲んで、静かに口を開いた。

「そう、ですね……最初にリディア嬢がいいと思った理由から話すと、立ち行った話になってしまいう可能性があるので、まずは『惚れ直した』日の話をさせてください。おそらく、これ『も』リディア嬢は覚えていないと思いますが……」

そんな前置きをして、私の瞳を見つめる。言葉の中に混ざるひつかかりを考えなきゃいけないのに、その真摯な様子に、トクンと胸が高鳴った。イケメンだなあ。顔だけ見れば、アレクシス殿下もイケメンなんだけど（なんせ乙女ゲームの攻略キャラなわけだし？）、中身がなぜあんなのか。それを知りたいところだわ。

「こちらに留学しに来たその日、私は貴女に助けられたのです」

はて、誰かを助けた記憶はないんだけど……？

こてんと小首をかしげると、フィリベルトさまはまぶたを伏せた。その表情に既視感があつて、ひとつの記憶がよみがえる。

女性に囲まれて困っていた人がいたような……丁寧に接していたけれど、動けなくて困惑しているようだった人。彼女たちの振る舞いに品位を感じられず、つい声をかけたのよ。

『淑女たるもの、相手の迷惑も考えずに騒ぎ立てるものではありません』

あれを言ったのは私であつて私じゃないんだけど……あー、ややこしい！

「思い出していただけましたか？」

「……ええ。ですが、それだけで？」

「言ったでしょう、惚れ直した……と。ずっと好きだった女の子が素晴らしい淑女になっていて、やはりあなたしかいないと……当時は身を引くしかありませんでしたが。とはいえ、困っていたところを貴女が助けてくれたのは事実。せめてお礼をと、ずっと思っていたのですが……」

私に声をかけられなかった、ということね。まあ、それは仕方ないと思うわ。何度か言葉を交わしたときだって、お互いに忙しくて二言三言の事務報告がやっとだった。「あのときはありがとうございまして」で伝わるほど近い頻度では話せなかったしね。

それに、あの学園ではずっと、私に取り入ろうとする人たちが周りに多くて、私も気を張っていた。公爵家の令嬢という身分に加え、アレクシス殿下の婚約者だったから、傍にいたほうが有益だろうという打算をいろんな人から感じ取ってしまい、気疲れしたのよね。

そんな人たちは表面上だけの付き合いにしようと、こちらの事情には踏み込ませなかった。

——改めて考えると、私、心を許せる友人がいなかったのだと痛感する。

あまりにも王妃教育にのめり込んでいたから、きつと周りが見えなかったんだわ。打算ではない人も、いたかもしれないのに。

これまでずっと、アレクシス殿下の婚約者ということで睨まれてもいたし、あの婚約は陛下とお父さまが決めたことだから、敵視されても困るのだけだ。

正直、あの学園で心から私の味方と言ってくれる人は、いないに等しいでしょう。

——ちょっと寂しくなってしまうた。いつか、私にも心を許せる友人ができるかしら……？

「きみは、娘の味方になってくれるのかい？」

お父さまに尋ねられ、フィリベルトさまは「もちろんです」と力強く肯定した。

その瞳には優しさがにじんでいて、息を呑む。

「ふむ。……実は本日、陛下に呼ばれていてね。悪いがリディア、フィリベルトさんのことを頼むよ」

「……もしかして、昨日の件ですか？」

「いろいろだよ、リディア。では、あとは二人で話してほしい。リディアの選ぶ道を、私は応援するからね」

お父さまはとても朗らかな笑顔で、椅子から立ち上がると応接室から出ていった。

残された私たちはしばらく黙っていた。ちらりと彼に目をやると視線が絡む。

「フィリベルトさまは、お一人でこちらまで？」

「屋敷の外に護衛を待たせています。ところでリディア嬢、よければ少し歩きませんか？」

彼の提案に短く応じた。ずっと応接室で黙っているわけにもいかないし……確か、花壇の花々が綺麗に咲いていたはずだから、中庭まで案内しようかな。

「ええ、いろいろお話したいですし」

頬に手を添えてにっこりと笑ってみせると、彼も微笑んだ。

お茶を飲み終え、応接室を出て、廊下で一度立ち止まる。

「中庭の花々が見ごろですの。なので、よかつたらそこまで行きませんか？」

「それはぜひ、觀賞してみたいですね」

それでは案内いたしましたよう、と歩き出す。中庭まで沈黙は続いた。ただ、一緒に歩くだけ。目的地に着くと、くるりと身体を反転させて、改めてフィリベルトさまを見据える。

「フィリベルトさま。——私、今からとても、貴族とは思えないことを言いますね」

「リディア嬢？」

「——私、恋愛がしたいのです」

さあ、と風が吹いて花々が揺れる。甘い香りが私たちを包み込み、不思議な気持ちになった。じっとフィリベルトさまを見つめる。彼は、私の切なる願いを、どう受け取ったかしら？

フィリベルトさまは、ふっと目を細めて微笑んだ。

「恋愛がしたい、ですか。確かに貴族の言葉ではありませんね」

「ええ。ですが私……昨日、アレクシス殿下に失恋しましたから。失恋の傷を癒すのには、新しい恋をするのが一番でしょうか？」

まあ、失恋したのは『リディア』であって、前世を思い出した私ではない。

今の私なら、きっぱりとアレクシス殿下と婚約を白紙にできてラッキー！ と胸を張れるわ。

王妃になるつもりなんてないの。支えてくれる人もいないのに、あんな重荷を背負いたくない。

さて、フィリベルトさまは、どういう反応をするかしら？

「ではぜひ、私に恋をしていただきたい」

おや、結構強気な発言。

一歩こちらに近づいて、すっと手を差し出した。この手を取るべきか否か、どうしようと考えていると、彼はそのまま口を動かした。

「それに、昨日の貴女はなにかに目覚めたような顔をしていました。夢から覚めたような、そんな顔を。私は、そんな貴女のことを知りたいと思いました」

私、そんな顔をしていたの？

頬に手を添えて、昨日のことを思い返してみただけれど、わからない。その様子を見て、くすくすと笑うフィリベルトさま。

「私と貴女なら、きつとどんなことでも乗り越えられるでしょう」

「……本当の私を知っても、そんなことが言えるでしょうか？」

だって、フィリベルトさまが望んでいるのは、前世の記憶を思い出す前の私。

「ならば——そうですね。お試しで構いませんので、私と恋人になっただけませんか？」

期間限定の恋人、ね。なるほど、それもありませんか？

疑い深い女でごめんね、フィリベルトさま。

でも、結婚する相手に恋をしたという、私の気持ちを汲んでくれているのもわかる。

「フィリベルトさまも、その期間に見極めてくださいませ。貴方が私を知って、それでも望んでくださるのなら——……ぜひ、正式にお付き合いしてください」

だって、貴方が知っている私は、私であって私ではないから。

差し出された手を取ると、彼はそっと手の甲に唇を落とした。

「必ず、貴女を大切にします。私のことを好きになってもらえるように」

ドキッと鼓動が跳ねたのは、きつと気のせいではないでしょう。

こうして無事に(？)、期間限定の恋人ができた。

「明日は登校しますか？」

「……いえ、明日も休みます。やりたいことが、あるので」

「やりたいこと……それは、私も協力できることでしょうか？」

え？ とフィリベルトさまを凝視した。彼は悪戯っ子のように笑い、自身を指す。

「もしも彼らに反撃をするのなら、私も参加させてください」

「……どうして」

「貴女を陥れようとする彼らが、やり返されるところを目にしたいので」

とん、と目尻を叩くフィリベルトさま。慰めているわけではないのだろうけど、彼の瞳の奥に怒りの炎が見えた、気がした。

「では、作戦が決まったらお伝えしますわ。それまで、私は学園を休むことにします」

顎の下で両手を合わせて、自分の考えを伝えると、彼は「楽しみにしています」とワクワクした様子で目を細めた。……もしかしてこの方、紳士的な言動はあとから身に付けたもので、本来はもっと感情豊かで心のままに動く方なのかしら？

「学園に登校するときは教えてください。エスコートするので」

「ありがとうございます」

一人で登校したら一齐に注目を集めてしまいそうだから、ありがたくその申し出を受け入れる。

もちろん、二人でも注目を集めるとは思うけど、分散はされるでしょう。

心底嬉しそうに笑うフィリベルトさま。……ああ、なんだかこの顔、いいなあ。

私、こんなに面食いだっつけ？ と首をかしげたくなってしまう。

ううん、もしかしたら、自分の好みを考えられる余裕が生まれたのかもしれないわね。

今日はきつと、婚約破棄の宣言をされたショックで休んでいると思われているだろう。作戦を立てて、準備を終えてから登校する予定なので、できるだけ早く準備を終えたいわ。

立ち止まっているのもなんだから、中庭を歩き出す。歩きながら、フィリベルトさまといろいろな話をした。

彼はとても話し上手で聞き上手だった。話しているうちに充実感が満たされて、もっと一緒にいたいと願うほど。……不思議な人だわ。

そういえば、今日も学園の日だけど、彼も休んだのかしら？

まさか昨日、断罪イベントが起これとは思わなかった。だって本当に卒業パーティーでもない、普通の試験お疲れさまパーティーだったもの。

「それでは、私はここで失礼します」

気づけば、中庭から離れてしまっていた。フィリベルトさまが立ち止まり、私を見つめて名残惜しそうに微笑んだ。

「本日は、素晴らしい時間をありがとうございました」

カーテシーをすると、「いえ、こちらこそ」と彼が柔らかく紡ぐ。顔を上げると、フィリベルトさまはそっと私の頬に手を添える。まるで、ガラス細工に触れるかのように、ふんわりと。

そしてそのまま顔が近づいて……反対側の頬に、ちゅつと軽くリップ音を立てて唇が触れた。すぐに離れたけれど。

思わずキスされたほうの頬に手を当てると、彼は晴れやかに笑む。

「赤くなった貴女も、可愛らしいですね」

そう言い残して、爽やかに去っていった。

バクバクと心臓が早鐘を打っている。私が恋に落ちるのは、あつという間かもしれない——中庭に立ち尽くした私を発見したのは、ローレンだった。怪訝そうに「お嬢さま？」と声をかけられて我に返った。

「ろ、ローレン……」

「お顔が真っ赤になっていますよ？ 風邪をひきましたか？」

ぶんぶんと首を横に振る。こんなに自分の感情がコントロールできないのは、初めてかも。

深呼吸を繰り返してから、ローレンの手をガシッと掴む。

「ローレン、お願いしたいことがあるの」

私が発した言葉はあまりにも硬く、彼女は目を瞠はなった。

「私にできることでしたら、全力でやりますわ」

「ありがとう、ローレン。チェルシーも呼んで、一緒に作戦を立ててくれたら嬉しいわ」

そうして私たちは、屋敷の書庫に戻ってこれからのことを会議した。その最中にお父さまが帰宅して、お父さまも加えて作戦を練る。

「お父さま、周りはまだあまり巻き込まないので、アレクシス殿下とフローラさまに反撃してもよろしいでしょうか？」

「明日、陛下に聞いてみるよ。否とは言わせないさ。そういえば、マダム・カステルがリディアのことを気にかけていたようだから、早ければ明日うちに来るよ」

マダム・カステル。私の王妃教育の先生だ。もう、マダムの耳にも婚約破棄の話が届いたの？

マダムはお父さまのいとこだから……いえ、きつと誰に対しても、とても厳しい方。身内びいき贖びきなんて絶対しないと安心できる、厳格な方。

頭の天辺てんぺんからつま先の角度まで、アレクシス殿下の婚約者であることを理由にそれはもう、散々とダメ出しを受けてきたのだ、私は。ちよつとしたトラウマにもなるというものよ……

でも、そんな彼女をこちらの味方に行けるのなら——百人力よね！

「……マダムにも協力をお願いできないかしら」

顎に手を添えて、ポツリとこぼすとすぐにローレンが賛成してくれた。

「よい考えだと思います。マダム・カステルのことをアレクシス殿下は苦手になっていますし、なによりお嬢さまの努力を一番見ていた方ですもの」

——そうね、マダムは王妃教育中の私をずっと見守ってくれた方だもの。

王妃教育を受けるとなれば、今度はフローラがマダムに教育されるだろうし。フローラだって礼儀作法くらいはできるでしょう。マダムのお眼鏡に適うかは、別問題だけど。

思考を巡らせていると、チェルシーがそろりと手を挙げた。

「あの、お嬢さま……昨日の婚約破棄の件で、ずっと引つかかっていたことがあるんです。本来なら、絶対ありえないことです。でも、そうなんじゃないかって印象が拭えないんです」

「チェルシー、その考えを聞かせてくれる？」

「はい。……あの……」

私たちはチェルシーの仮説に耳を傾ける。確かに『絶対ありえない』ことだ。

ただ、前世のゲームの知識と王妃教育の知識を併せ持つ私は、抜け道を思いつく。転生者しかできないやり方だけど、『彼女』も転生者なら、できる。

前世の知識についてはどこで知ったか巧妙にぼかし、お父様に告げる。

「この推測が合っているなら……」

「由々しき事態だが……そこら辺も含めて、明日陛下に聞いてみるよ」

お父さまは腕を組んでまぶたを伏せた。

「では、明日……様々なことをまた、話し合いますよ」

みんな、こくりと首を縦に振った。

マダムと会うのはちよつと緊張するけれど、彼女が味方になってくれるのなら心強いわ。

二章 同じことはしないけど

翌日、早朝に目が覚めた。

これからのことを考えると、ドキドキしてあまり深く眠れなかった。アレクシス殿下たちはたくさんの人を巻き込んで婚約破棄を宣言したけれど、私は人数を絞って反撃するつもり。だって、彼らと同じことはしたくない。

何度か深呼吸をして、心を落ち着かせる。しっかりと目を覚まさないで。

部屋に置いてある鈴を鳴らすと、数分もしないうちにローレンとチェルシーが来たので、身支度を整える手伝いをお願いした。

ローレンはお父さまに『マダム・カステルが今日の午前中、リディアに会いに来るよ』と、手紙を渡された話をした。マダムが来るのなら、気合を入れなくちゃね！

朝は中庭を歩きたいから、ラフな格好にした。朝食を摂ったら、中庭に移動して軽く散歩をしつつ頭の中を整理しよう。

身支度を整え、ローレンとチェルシーに「ありがとう」とお礼を伝えて、私は食堂へ向かった。食堂にはすでにお父さまがいて、こちらに気づくと「おはよう」と目もとを柔らかく緩ませた。

「おはようございます。お父さま」

挨拶を返して、私はいつもの席に座る。すると、食事が運ばれてきた。

すべての料理が置かれて、私たちは手を組んで祈りを捧げる。食べる前にはこうしてお祈りをするのが、この世界のルール。

「お父さま、今日のことですが……」

「ああ。私は朝食後すぐ、陛下たちのもとへ行くよ」

「……あの、昨日聞きそびれたのですが、私とアレクシス殿下の婚約は……」

「白紙になるよ。そこは安心して。……すまないね、リディア。幼い頃から王妃教育に縛り付けてしまつて」

お父さまが沈んだような声で詫びたので、私は軽く首を横に振った。

「いえ。王妃教育は厳しいものですが、知識が増えていくのは楽しかったの……」

心からの気持ちだった。だって、本当にそうだったもの。

幼い頃、アレクシス殿下の婚約者になったとき、王妃教育としてマダム・カステルと王宮の離宮で勉強していた。

当時はなにも考えたくなくて、王妃教育にのめり込んでいたのよね……お父さまたちに心配をかけてしまっていた気がする。

「そのおかげで、今の私がいるのです」

安心させるように微笑むと、お父さまの目に涙がにじんだ。

「いい子に育つたなあ……」

感無量、とばかりに涙ぐむお父さま。ハンカチを渡すと、それを受け取って目尻の涙を拭き取る。

「リディア。私はリディアのことを応援しているからね。味方がいることを、忘れないように」

「ありがとうございます。お父さま」

私の味方だとキツパリ言い切ってくれるお父さま。家族の愛を感じて、心が満たされた。

「……それと、フィリベルトさまのことですが……」

「そういえば、どうするんだい？」

「……婚約者、ではなく、期間限定の恋人として過ごしてから、決めることにしました」

お父さまは目を皿のようにした。

でも、「そうか」とだけ言つて、食事を開始した。その口調が柔らかかったから、きっと私の意思を尊重してくれるのだろう。

食事を終えて、お父さまは王家に反撃の許可と、昨日のチェルシーの考察を伝えるためフローレンス邸をあとにした。

私は朝食後、中庭まで歩いて肺いっぱい空気を吸い込んだ。

新鮮な空気を吸い込むと、頭が冴えていくような感覚になる。

マダムに協力をお願いする内容を反芻しながら、中庭をぐるりと一周した。

うん、歩きながら考え事をする、どんどんとアイデアが湧いてくるわね。

マダムにどう説明しようか悩んでいたけれど、ここは直球に言ったほうがいいだろう。

幼い頃からの付き合いだもの、遠回りよりも直球のほうが彼女の心に響くだろう。

自室に戻り、ローレンとチェルシーにお願ひしてマダム用のドレスに袖を通し、メイクをした。

深緑色のドレスは、レースを使っているのがポイントで、割と華やかだ。

マダムと会うときは、上品ながら華やかなドレスを。

ハーフアップにした髪には、薄いピンクのリボンで愛らしさをプラス。

ヒールは赤。真っ赤ではないけれど、光を受けるとキラキラと輝く加工がされている。

ピンク色の口紅、頬にもチークをして血色をよく見せる。アイメイクは薄めだ。

……それにしても、噂ってあつという間に広がるのね。学園に行ったら、どんな目で見られるのかちよつと不安だわ。私が着替え終わったところで、部屋の扉がノックされた。

「お嬢さま、マダム・カステルがいらっしゃいました」

「すぐに行くわ」

執事の声だった。私はまっすぐに鏡の中の私を見つめる。

鏡の中の『リディア』は凛としていた。——本当、こう見ると美人よね、リディアって。

「ローレン、チェルシー、とびつきり美味しいお茶とお茶菓子をお願いするわね」

「かしこまりました、お嬢さま」

「お任せください！ お嬢さま」

二人の頼もしい言葉を背にして、私は応接室へと足を進めた。

でもやつぱり、マダムと会うのは少し……いいえ、かなり緊張する。

緊張を解くため手をグーッと握りしめて、パツと力を緩めた。

それから天井を仰いで息を吸い込み、ゆつくりと吐き出す。……うん、ちよつとは落ち着いた。

「お嬢さま、お嬢さま、お嬢さま」

応接室の扉をノックして、返事を耳にしてから音をあまり立てないように開けて中に入る。

すると、マダムが振り返り、私を見るとふわりと笑った。

「ごきげんよう、リディアさま。今日もお美しいですわね」

「ごきげんよう、マダム。張り切って準備しましたの」

私もにっこりと微笑む。マダムは「よろしい」とばかりにうなずいて、こちらに近づいてきた。

じつと見据えられ、その瞳に私への慈愛を感じ取って、少しだけまなじりが下がる。

彼女はどこか安堵したように息を吐き、そつと私の肩に手を置いた。

「思ったよりも元氣そうですね」

「心配してくださったのですか？」

「ええ。わたくしの耳にも様々な噂話が届いていますから」

いったいどんな噂話なのか、知ったほうがいいのか知らないほうがいいのか悩むところね。

あの婚約破棄宣言、もう王都全体に広がっているのかしら……？

ただ、想像でしかないけれど、ろくでもない噂話のような予感がするわ。

「ご心配、ありがとうございます。どうぞお座りください。そして、私の頼み事を聞いてくださいませんか？」

「わたくしに頼み事、ですか？」

「はい。——ぜひ、次期王妃候補を、その目で確認していただきたいのです」

マダムが座るところを見届け、私は彼女の真正面に腰を下ろした。

ローレンとチェルシーがお茶とお茶菓子を持ってきてくれたので、それを優雅な仕草で飲みつつ、口の端を上げてマダムを誘う。

「それはいつでしょうか？」

「できれば早急に紹介したいですわね。マダムの時間を奪うことは本意ではありませんが……」

「ふむ……。わたくしの予定は……そうですわね、明後日の午後から数日空いていますわ」

明後日の午後から、ね。頭の中にそのことを刻みつける。

「明日、学園に登校してフローラさまに話してみますわ。明後日の放課後、マダムには離宮にてフローラさまを見ていただきましょう」

私が誘えばきつと乗ってくると思うのよね、フローラ。

「その際、フローラさまの『ご友人』も数人呼んで構いませんか？」

「ええ、いいでしょう。わたくしもその『フローラ』という少女を、この目で見たかったのは事実ですから」

フローラとマダム、相性はどんなものかしらね。

それにしても、あまりにもあつさりとして承してくれて、ちょっとだけ拍子抜け。もっとう、いろいろ言われるのかと身構えていたのだけけど……

「アレクシス殿下もいらつしやるのですか？」

「おそろくは」

フローラと一緒に来るんじゃないかな？ あのと二人、ずっと一緒にいるし。

どのくらいフローラの『ご友人』が参加するかは、わからないのだけど。マダムは扇子を広げて口元を隠し、眼光を鋭くさせた。

その瞳の奥に、ギラギラと炎が燃えているのは、気のせいではない、わよね……？

「ところで、リディアさまはこれからどうなさるのですか？」

「……実は、竜の国、ユミルトゥスの方に求婚をされています……」

フィリベルトさまのことを口にする、どうしてこんなに頬が熱くなるのかしら。

「まあ！ 竜の国といえは、『竜の涙』が有名な国ですわね」

竜の涙——それは、万能薬と呼ばれているもの。

守り神である竜が、疫病で苦しんでいる国民たちを憐れんで流した涙。

それが薬になり、国民たちは救われたというおとぎ話。なぜ私が知っているかというと、王妃教育でマダムに教わったから。

「ユミルトゥスの公爵家の方に、求婚されました」

「あら、それは素晴らしいですわ。あちらの国の方は男女ともに愛情深く、結婚すると絶対に離婚しないらしいですわよ」

……それ、愛情深いというか、執着心が強いのでは……？

ともあれ、マダムに協力をお願いできてよかったわ。

それから少しのあいだ世間話で盛り上がり、マダムは帰っていった。

彼女を見送って自室に戻り、ベッドに飛び込む。